

令和2年度 病害虫発生調査速報 第1号

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率検定（結果の速報）

1. 対象作物：水 稲
2. 内 容：ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、全地点平均で13.5%であった。例年より保毒虫率が高くなっていることから、イネ縞葉枯病の多発生が懸念される。
3. 調査結果の概要
 - 1) 地点別の保毒虫率は検定した8地点のうち7地点において保毒虫率が10%以上、全地点平均では13.5%と例年に比べて高い値であった（第1表、第2表）。
 - 2) 近年、イネ縞葉枯病の発生が増加傾向にあり（第1図、第2図）、今後の多発生が懸念される。

第1表 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の地点別状況(%)

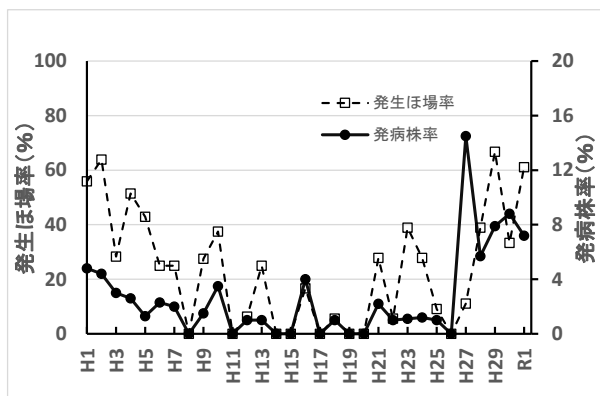
検定地点	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年
木田郡三木町田中	0.0	2.0	4.0	6.0	5.0	8.0	6.0	17.0
高松市小村町	1.0	3.0	3.0	1.0	3.0	7.0	5.0	14.0
高松市香川町川東	4.0	16.0	8.0	6.0	10.1	8.0	13.0	18.0
綾歌郡綾川町陶	3.0	5.0	7.0	2.0	3.0	7.0	8.0	13.0
綾歌郡綾川町北	5.0	6.0	6.0	5.0	4.5	7.0	8.0	17.0
仲多度郡まんのう町東高篠	4.0	5.0	2.0	1.0	3.0	11.0	6.0	11.0
仲多度郡多度津町葛原	8.0	5.0	6.0	4.0	3.0	8.0	5.0	6.0
三豊市豊中町笠田	-	-	-	-	-	-	3.0	12.0
平 均	3.6	5.5	5.1	3.6	4.5	8.0	6.8	13.5

注)5月下旬に小麦で採集したヒメトビウンカの中老齢幼虫を検体とし、個体別に検定した。
 検体数は各地点において最大100個体とし、採集個体数が100に満たない場合は全個体とした。
 平成25年から令和元年までは高比重ラテックス凝集反応法で、令和元年からは簡易ELISA法で検定し、陽性の比率を保毒虫率とした。
 令和元年度に高比重ラテックス法と簡易ELISA法で調査した結果、両手法でほとんど差がないことを確認した。

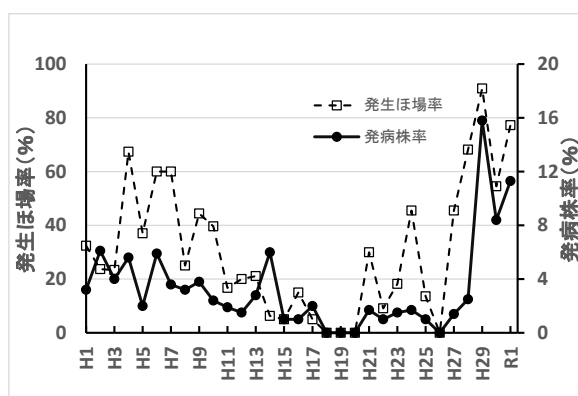
第2表 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	平年	R2
採集地点数	7	9	8	8	8	7	7	7	7	8	-	8
検体数	447	840	800	800	800	700	700	688	700	800	-	800
保毒虫率(%)	1.8	3.1	4.6	3.6	5.5	5.1	3.6	4.5	8.0	6.8	4.9	13.5

注)5月下旬に小麦で採集したヒメトビウンカの中老齢幼虫を検体とし、個体別に検定した。
 検体数は各地点において最大100個体とし、採集個体数が100に満たない場合は全個体とした。
 平成22年から令和元年までは高比重ラテックス凝集反応法で、令和2年は簡易ELISA法で検定し、陽性の比率を保毒虫率とした。
 令和元年度に高比重ラテックス法と簡易ELISA法で調査した結果、両手法でほとんど差がないことを確認した。



第1図 縞葉枯病の発生推移
(早短期水稲、8月上中旬)



第2図 縞葉枯病の発生推移
(普通期水稲、9月上中旬)

4. 防除実施上の留意点

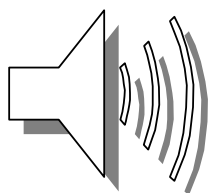
- 1) ウンカ類対象の育苗箱施薬を行う。育苗箱施薬を行っていないほ場やイネ縞葉枯病の発生が多い地域では、本田初期にヒメトビウンカを防除し、水田内でのヒメトビウンカ幼虫の密度上昇を抑える。薬剤の選定にあたっては、地域の防除暦等を参考にする。
- 2) 本田初期の発病株は二次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。
- 3) 収穫後に発生する再生稲（ひこばえ）や水田周辺のイネ科雑草が、ヒメトビウンカの生息・越冬場所となる。収穫後は耕起し、刈り株をすきこむ他、雑草の管理を徹底する。



写真1 縞葉枯病の症状



写真2 ヒメトビウンカ成虫



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。
農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

病害虫防除所インターネットホームページ
URL: <http://www.jpjn.ne.jp/kagawa/>